

みんなねつと九州大会 in 沖縄

1月30、31日に那覇市内で開催された「一人も取り残さない ゆいまるる沖縄大会」に参加しました。暖かいイメージの沖縄ですが、風が強く肌寒い2日間でした。大会のオープニングセレモニーは、沖縄ダルクの皆さんによるエイサーでした。勇壮な太鼓と、「チョンダラー」と呼ばれる白塗りの道化役の登場で会場も盛り上がり、カチャーシーで締めるといふ沖縄らしいおもてなしを受け、会場全体が笑顔に包まれる中、大会は始まりました。



開会式の後には特別企画「沖縄の私宅監置」と題して、ドキュメンタリー映画の上映と2名の方による講演がありました。映画は「夜明け前のうた 見棄てられた沖縄の精神障害者」という今春公開予定の映画のダイジェスト版で、私宅監置が行われていた当時の写真や、監置小屋を再現した映像、その小屋で一夜を過ごす体験をする様子、私宅監置されていた女性についてのエピソード等が映し出され会場は静まり返りました。日本で私宅監置が禁止された後も沖縄では20年以上続いたそうです。同じ日本でありながら、米軍統治下の沖縄の状況がどのようなものであったかを改めて知ることとなりました。本編は春の公開に向けて編集中で、全国の劇場での上映を考えているので、上映してもらえれば劇場があれば声をかけてほしいとのことでした。この映画が精神保健福祉の関係者に限らず広く一般に公開されて、多くの方に関心をもちてもらえることを願いました。その後、ハンセン病の両親を持つ男性が「国策の犠牲になった両親」という題で、国策で行われてきたハンセン病の隔離政策と、それによる差別や偏見が今も根強く残っていること、辛い幼少期の記憶や体験について語り、国民の多くはそのことを知らない、正しく後世に伝えて差別に向き合っていかなければならないと強く語っていました。

当事者の高原里緒氏からは「私宅監置と自立生活」についての話がありました。高原氏は現在、精神&発達ピアスタッフとして当事者運動をしており、その様子や、私宅監置小屋に対する考え、自身の体験を交えた自立生活について、良かったことや困ったことを具体的にあげてわかりやすく伝えてくれました。障害がある、「守られる存在」にならずに「まうこと」、「危険かもしれないけど、挑戦すること」で新しい発見や新たな世界が見えてくる、失敗することや学び成長・自信につながるという話は、聞きながら思わず「うん、うん」と頷くような説得力のある言葉でした。



二日目は、精神科医の稲田隆司先生の「リカバリー 痛みのあると連帯」という基調講演から始まり、琉球古来の世界観や癒しの風土について、ユタ(霊媒師)と地域の人々のかわりや、自助グループとのかかわりで考えさせられたことについての講演でした。最後のシンポジウムは、3名のパネリストが登場しました。沖縄市の家族会会長島袋氏の話は、家族による家族学習会を通して学んだことや、家族会活動に参加するご家族が少しずつ増えていること、継続することの大切さについてでした。当事者会代表の知花氏は、発達障害当事者として、就労支援の次に必要な支援が当事者会であるということや立ち上げた会の活動の様子をしっかりと口調で、「新しい支援の仕組み」として発表されました。作業所職員として働く当事者の比嘉氏は「自身のリカバリーについて、心の中の葛藤や、自分に対して一般的な仕事や生活を望んでいた父親がそのままの自分を受け入れてくれたことを発表し、これまでの時間は、自分自身と出会う大切な時間であったと締めくくりました。とても中身の濃い大会でした。この大会では、当事者の活躍が目を見えました。これからも様々な場所で当事者の声を聴く機会が増えることを期待したいと思います。大会の企画や運営をされた沖縄県連関係者の方への感謝の気持ちとともに、参加できたことが大変ありがたいことと感じた二日間でした。

九州ブロック沖縄大会の1月30日から2泊3日のツアーに参加しました。沖縄空港に降り立つと入航デッキの両脇に洋蘭鉢がずらりと並んだ様子は、南国情緒たっぷり嬉しく感じました。高年齢の為か、ままならぬ事もありましたが、天候にも恵まれ、大会の研修内容は充実ある講演内容でした。また、琉球太鼓、舞踊等歓迎一色で和ませてくださいました。

2日目の午後からは沖縄家族会の皆様と2台のバスに分乗し私宅監置の視察へ。2時間余りを要し、車窓より見える沖縄独特の門がまの家屋、海岸線の光景は素晴らしい感動しながらも、しばらくすると、静かな竹まいの北西地区当たり到着しました。小高い山間に1軒の空き家があり、その奥地に以前まで住まれた1坪ばかりのレンガ造りの「ろうごく」が。窓は小さく、入り口は鉄板でふさがれ出られないように。当事者のお世話をされた方からの説明がありましたが現状を目の当たりにし、50年近くここを利用された事について、詳しく聞くことが出来ませんでした。家族の方の苦しい立場も考え、沖縄地方、日本中、当事者の立場とも扱いが苦難の時代でした。現代に入り、世界交流のお陰で、福祉、教育、精神問題に関わる今日、一般の方々にも当たり前に関心ある家族でありたいと思う限りです。

のぞみ会(中央区) 石河定子

私宅監置を視察して

第2回家族・職員研修会

令和2年1月24日、吉塚合同庁舎にて開催されました研修会に参加しました。はじめに、『相談電話対応法』というテーマで藤みよこ氏のお話を聞きました。



まず、カール・ロジャースのカウンセラーの三条件、①共感的理解②自己一致③無条件の肯定的尊重の基本的態度で『傾聴』することです。ポール(信頼関係)が生じるということをお話されました。そして「聞く技術」についてお話しされました。例えば時として沈黙に耐え、話を遮らないこと、そして何より大切なのはアドバイスはしないということ。解決策はその人自身が見つけていく、答えは本人が持っているということをお話されました。そして心を込めて丁寧に話を聞く姿勢、すなわち『傾聴』することが、最も大切だと話されました。『傾聴』の『聴』は耳と目と心でできくことであると結ばれ、最後にサンフランシスコ市精神障がい者インディペンデント・リソースセンター出典の「傾聴へのメッセージ」を読み上げられ、話を締めくくられました。その後の5、6人に分かれてのグループワークでは、電話相談の今までの経験話や対処の方法をお聞きすることができ、とても勉強になりました。

私も今後、家族相談員として相談電話を受けたとき、今回の研修会で教わったことを心にしっかりと持って、相手の気持ちに寄り添いながら、しっかりと『傾聴』していきたいと思えました。

福精連理事 隅谷和生

事業所部会/第3回家族・職員研修会

令和2年2月21日(金)吉塚合同庁舎で午前中から事業所部会を開催して、午後から行われる研修会の打合せと、来年度からの部会の役割などについて話し合いました。

事業所(福岡ブロック3名、北九州ブロック2名、筑後ブロック2名)からなるチームのことで、午後からは、各ブロックから2名の利用者の方から、「うちの事業所自慢」と題して、それぞれの方が通っている事業所の自慢話を発表してもらいました。障がい特性からか、急遽の欠席もありましたが、その通所先の代表の方が代打となって発表くださいました。発表後は、少数人数でのグループワーク(意見交換)を行い、無事に研修会を終了しました。

今回の研修を通して感じたことですが、偉い先生や立派な職員の講話も勉強になります。やはり、利用者の声はとても大切だと感じました。法や制度や事業が整備され、様々な新しいサービスが誕生する中、日々の事業運営に追われて、当事者の声に耳を傾けなくなるときに事業所は死んでゆくのだらうと思いました。

今回ご発表いただいた方々にお礼を申し上げます。ご報告とさせていただきます。

グループホームとして(福岡ブロック) 村上大作

新任挨拶

福精連理事兼事務局長 金子 勇人

4月より事務局長となりました。今後は事務局長と事業所(よからぼ)との兼務となりますが、皆様により良く後方支援を行ってまいりますので、宜しくお願い致します。

福精連理事 白石 雄二

この度副会長(福岡ブロック)を拝命しました。家族会と事業所がみんなねつと福精連に結集する事で法制度改正やバス等の交通運賃割引が実現できました。誰もが地域で安心して暮らしていけるよう引き続き力を合わせましょう。

R2.4月より電話相談の時間帯が拡大されます!

夜間休日相談電話が4月1日よりスタートしました。令和2年3月までの平日昼間の3時間に加え、平日(15時間)土日祝日24時間の相談電話について、当事者、家族を対象とした相談活動の一環です。一人で問題を抱え込まずお気軽にご相談下さい。

- 【相談時間】 平日 13時~16時
- ・月曜日 090(1366)7498
 - ・火曜日 080(2750)0646
 - ・第4水曜日 0940(33)2731
 - ・第4水曜日以外 080(3986)1980
 - ・木曜日 080(3986)1980
 - ・金曜日 080(4279)2970
- 【相談時間】 平日 0時~8時、17時~24時
土日祝日 0時~24時
080-1729-1950
- 土日祝日 8時~16時のみ
080-1729-1955

